

# Do / Be NEWS

Do what you have to do + Be what you want to be



皆様、こんにちわ。元気ですか？

さて、長々お待たせしていました、Do/Be News。

一季節丸々休んでしまったので季刊とは言えないですが、今年は隔月ではなく、不定期、季刊でお届けしております。アメリカと日本という距離を考慮してのことなのでよろしくお願いしますね。(ウェブ版は、隔月により近い状態で更新中です。)

## まめこのこれすき

Shirley Horn Trio in Carnegie  
/June 19, 1999

*foolin' myself  
how am i to know  
time for love  
fever  
medley: i fall in love too easily - this Hotel  
i've got the world on a string  
where do you start?  
here's to life*

今年で65歳になった Shirley Horn。今回のフェスティバルでも Oscar Peterson、Dave Brubeck と並んで The Older the Better の括で敬意を表されている。健康そのものに見受けられるが、これからあと何回彼女を見られるのかと思うと、機会があれば見られるだけ見たいと思うのは私だけではないだろう。そんなことを考えながら待っていると、やがて開演のベルは鳴り、緑の光沢のあるドレス姿の彼女とタキシード姿の Charles Ables、そして Steve Williams が下手から登場。私の席は前から6列目の真ん中で、ピアノに

埋もれたように彼女が見える。ピアノの弾き語りを見るにはあまりいい席ではないけれど、彼女のオフマイクを通じた小声の合図やつぶやきがきちんと聞こえる距離だ。

シンガーには珍しく、彼女はとにかくメンバー紹介以外はMC ゼロで押し通す。仮に長い沈黙があってもまったく不自然でなく、余裕すら感じる。多分、この日が嵐だったとしても、天気の話などせず、あのままMC ゼロでさくりと演奏するんだろう。演目は、彼女が今まで出したアルバム、Close enough for love 以降の中から数曲づつバランスよく、かつ彼女のライブらしく遅め遅め(!)の曲をたっぴり、しっかり聞かせる構成だ。

いの一冊の Foolin' myself は、過去2回見ているライブでも一曲目に演奏しているところからすると、かなりお気に入りの曲のようだ。確かにとてもよいスターター。

2曲目は Major キーのボサノヴァ。ぱっとすぐ曲が分からないまま最後まで聞いてしまった。悪しからず (Guess で how am i to know を上のリストには入れておきました。自信がないのでコメントはご勘弁を)。

3曲目の Time for love で、観客は絶好調。私もイントロ聞いてすぐ分かったから、『きゃー、シャーリー状態』に(ちなみに、となりの連れはびっくりしていた様子)。アルバムのテンポより更に遅く、しっとりとしてシャーリーが歌う。もう、リズム隊にとっては気が狂いそうなくらい遅いはずなのだが、しっかり彼女についていく Ables と Williams。素晴らしいの一言。曲が終わり、既にスタンディング・オベーションをする人もちらほら。それくらいパワフルな演奏だった。

次に気持ち遅めのミディアムで Ables と彼女の左手がパターンを刻む。もう、絶対 Fever だ! と思って、さっさかメモをとった私。当たりだった。この曲が今夜のプログラムの『動』にあたるナンバーで、会場は完全に彼女に釘付けになったと思う。この曲は、どうも若い人が歌うと、なんだか毒気が強すぎて、安いお色気が漂ってしまう。しかし彼女が歌うと、ちょっと厭らしくなく、それでいてセクシーな、誰もが心をくすぐられるのである。気がつくと、笑みがこぼれているのだ。

Fever:  
never know how much i love you,  
never know how much i care.  
when you put your arm around me,  
i get a fever that's so hard to bear

\*you give me fever when you kiss me,  
fever, when you hold me tight,  
fever in the morning,  
fever all through the night  
sun lights up the day time.  
moon lights up the night.  
i light up when you call my name,  
and you know i'm gonna treat you right.

\*repeat  
everybody's got the fever  
that is something you all know.  
fever isn't such a new thing.  
fever started long ago.  
ROMEO loved Julliet.  
Julliet felt the same.  
when he put his arms around her,  
"Julie, baby, you're my frame."  
thou givest fever when we kisseth.  
fever rith thy flaming youth.  
fever- i'm fire.  
fever, yea i burn forsooth.

歌詞は、延々5番まであるのだが、彼女は4番までにしていたようだ。3番のロミオとジュリエットの下りなどは、あまりにも粋である。ちなみに4番はボカホンタスとキャプテン・スミス。

I falling in love too easily - (仮称) This Hotel のメドレー。ルバートで始まり、ぼつぼつと語るように、言葉を噛みしめて I falling in love too easily を歌う。この歌を感情丸だしで、がーっと歌う人があまりに多いが、私は彼女の静かで切ない歌い方が大好きだ。そしてイン・テンポから、またルバートに戻り、しばらく間奏がはいる。間奏の最中にモジュレーション(移調)していき、(仮称) This Hotel へ。私はこの曲は知らないのだが、聞くのは2度目。多分、ミュージカルナンバーじゃないかと思う。彼女の録音では聞いたことがないし、他の人のものでも持っていない(タイトルが仮称なのはそのせい。ごめんなさい。もしかしたら私がないアルバムの中にあるのかも。)彼女らしい選曲センスだ、普通の人は選ばないよなー、ととしみじみ思う。感じとしては、Come Little Closer 的な、1ライン、1ライン、語りかけているような、バラードである。

I've got the world on a string は、想像がつくようにミディアム、ばりばりのスイング。彼女にしてはかなりラフな歌

い方なのだが、また、そこが良いのだ。場内も、そろそろ佳境だぞ、的ムードで手拍子まで入れる人も。実際、この夜の最後のミディウムテンポの曲だった。エンディングはアルバムと同じものだった。

最後の2曲は Here's to Life からのナンバーで、Where do you start?, そしてタイトル曲の Here's to life。このアルバムは、一応 Miles Davis に捧げたアルバムなので、確かにこの夜のテーマにはまった選曲だろう。私は、このアルバムを買った当初は、アレンジャー／プロデューサーの Johnny Mandel に造られた Shirley という気がして今一歩アルバムが好きになれなかったのだが、段々聞いてゆくうちに好きになり、今では大好きなアルバムのひとつになった。中でも、この2曲が非常に好きで、この夜の締めくくりに演奏されたため、いたく感動した。あのアルバムはオーケストラ主体の、J. Mandel の完全アレンジで成っている。よって録音は、非常に厚みのある音だ。しかし、ライブでストリングス・サウンド抜きで聞いても、十二分にゴージャスだった。アレンジは基本的に録音といっしょで、弦がぬけた状態。何度も録音を聞いているので弦の印象がライブとオーバーラップしちゃうかな?と不安になったのだが、不思議と頭の中ではひとつも弦の音は鳴らず、今目の前にある彼女のトリオが奏でる音でいっぱいになった。

よく、シンガーで誰が好きと聞かれる。その際、生きている人の中では Shirley が一番好きだと答える。でも、彼女がこの世を去っても、もしかしたら一番好きと言うようになるかもしれない。勿論、Sarah、Carmen も大好きで、実際影響を受けたシンガーだというのは否定しない。しかし、自分のスタイルという意味では、Shirley の傾倒はどのシンガーと比べても大きいと思う。やはり、何を歌っているのか人に伝わる、人に伝えられる歌い方に心魅了されるのだ。この夜の2番手、カサンドラも大変素晴しかったのだが、どうも歌詞を伝えるという面では、クオリティーにはばらつきがあり、きちんと歌詞が聞えてこないものの方が聞えてくるものに比べて多かったのだ。その点に関しては、私の中では納得がいかなかった。きっと、アメリカ人にしてみれば、音的には聞こえているのかもしれないのだけれど、心まで届くか?と言えば、どうだろう。勿論、日本人の私が歌う歌詞も、アングルは違っていても、カサンドラと同じ問題にぶつかる。でも、志として Shirley の言葉を大事に歌うところは、誰もが引き継ぐべきものだと思うはずにはいられないのだ。

---

実はウェッブの方では、これ好き、#14 までイってます。一気に、ペーパー版に載せたいところですが、それもまた無茶な気がするので、ちょっとづつ反映させていきたいと思います。

さて、いきなり。お店紹介コーナーを新装開店し、意味不明の「ここはここよい」というやっぱりお店紹介をするコーナー第2段を始めます。以前のお店紹介は、自分がお世話になっているお店を書いていたのですが、アメリカでは、まだそういうお店にめぐり合うほどに至っていないので(そのうちな!まってるよお……)、ジャムセッションで行ったところ、誰かを見に行ったり、などを紹介しようと思います。タイトルは、気持ち的に、ここはここでまた良いです、というつもりで(!)ここはここよい、になりました。失礼!

---

## ジャムセッション 1

記念すべき第一回は、St. Nicks。場所は、149St と St. Nicholas の角付近、Sugar Hill と呼ばれる地域にあります。キレイな場所ではないですが、ハーレムのお隣元、楽しい人々でいっぱいでした。ハーレムのナイトツアーにはジャズのツアーもあり、その中のルートに含まれている、近辺では老舗に入る場所の様でした。基本的に、毎晩セッションになる、というよりなってしまうらしく、特にこの日がセッションとしては宣伝されていない上、有名情報誌にもこれといってスケジュールは店として出していない。公には月曜と水曜がセッションとして知られているようです。そのうちの月曜のセッションに参加してみました。ちなみに、水曜日はボーカルジャム。近々行ってみようつもりです。

さて、気になる値段、雰囲気、演奏レベルですが、まず値段は基本的にチャージなしで、ソフトドリンクは5ドル前後。ただ、セットの合間、教会への寄付金を募るドラマーが店を巡回します。それに入れるお金がチャージとして考えた方がいいかも。しかしこれは心づけあって義務ではないですから、お金がなければいいので、貧乏ミュージシャンには助かります。お店のスタッフは忙しいこともあり、無愛想ですが、常連には親切だ、という印象を受けました(爆笑)。でも、2度目にいくと、演奏したことがある人を覚えてくれているようで、ちょっと1度目よりやさしいじゃない!と感動します。

雰囲気は、誰でも気軽に入れます。ステージは狭く、ピアノはエレベ、それも61鍵ではないかと思われるもの(!)。嫌でもここは日本ではない、と気づきます(笑)。かぶりつきのテーブルに日本人のグループがくるケースが2度ありました。うちのカールさんがよ

せばいいのに「東京からですか?」と声をかけたら、英語で「I am from OSAKA and now I am living in Harlem!!」と思いきり興奮放され、びっくりして何も言い返せませんでした。東京じゃなく、大阪だったら大丈夫だったんでしょうか?よくわかりませんが、かなり緊張して見に来ているようなので、日本人に声をかけるときは気をつけましょう!?

演奏は、ジャムセッションだから「ばらつき」はあって当然ですが、当たり前ながら初心者はいないので、平均点は必然的に上がります。日本同様、管は圧倒的に多く、ベースは少ない、という典型的な分布です。が、ボーカルが多かったのは予想外でした。やはりもともとがボーカルのベニューだったか何かした影響じゃないかと思えます。あと付け加えるなら、ギターの参加者のレベルが高かったのが印象的です。

月曜しか参加したことがないので、全体を一言でまとめるのは厳しいですが、個人的にはすごく好きです。たとえ、PA最悪の状態、で自分の声が聞こえないような場所であっても、あのごちゃごちゃした雰囲気は一度味わうとはまるかも。勿論、鋭く、ホットな感じはないにせよ、ストレートな反応を感じるには良い場所です。

時間は、11時半ぐらいから朝の5時過ぎまで続きます。翌朝が気に入らない人は、最後までいても面白いですし、次の店へ移動するのでもまた良いです。店は2時を過ぎると、完全にミュージシャンと常連主体になり、観光客は減ります。ゆっくり楽しみたい、または人ごみを避けたいヒトは、時計が12時を回ってから出かけるというかもしれません。

---

編集後記：有り難いことに平は歌をうたっているのか、元気なのか、といった声を頻りに聞きますが、ワタシは元気です。まだ、仕事に結びついてはいませんが、最近とても良いドラマーに出会いました。時間をかけて自分が納得するメンバーを揃えて活動したいな、なんて思っていたりします。それまではゆっくりと、焦らずに一歩一歩進むつもりです。日本に戻ってくるのか、一時帰国は、といった声も耳にします。答えとしては、一時帰国は考えていますが、今年是实现しそうでないでしょう。できれば来年ぐらい、そして Do/Be SPECIAL で松岡といっしょに皆様にお目にかかれることを期待しつつ毎日を過ごしています。気長に待っていてください。そして、ワタシが留守の間、松岡の応援もよろしく願いますよ、皆さん。(まみこ)

Do/Be News 発行人/ 平 麻美子 & 松岡ゆかり  
Do/Be SITE <http://www3.tky.3web.ne.jp/~esylinv/index.htm>  
Mamiko's Thoughts / Side BE  
<http://www.geocities.com/Tokyo/Field/1380/index.html>